

教学研究所編

親鸞聖人行實

東本願寺

大興寺壽經言
 其功本願不問幾生幾世
 自念到彼國 白我本願
 又
 其功本願不問幾生幾世
 自念到彼國 白我本願
 又
 其功本願不問幾生幾世
 自念到彼國 白我本願

大興寺壽經言
 其功本願不問幾生幾世
 自念到彼國 白我本願
 又
 其功本願不問幾生幾世
 自念到彼國 白我本願
 又
 其功本願不問幾生幾世
 自念到彼國 白我本願



和朝經觀音菩薩正持佛
 本願在法華經云 生於法華國者
 其功本願不問幾生幾世
 自念到彼國 白我本願
 又
 其功本願不問幾生幾世
 自念到彼國 白我本願
 又
 其功本願不問幾生幾世
 自念到彼國 白我本願

安城御影（重要文化財・真宗大谷派藏）



本願寺聖人伝絵・康永本 (重要文化財・真宗大谷派蔵)
上 稲田草庵 下 聖人入滅



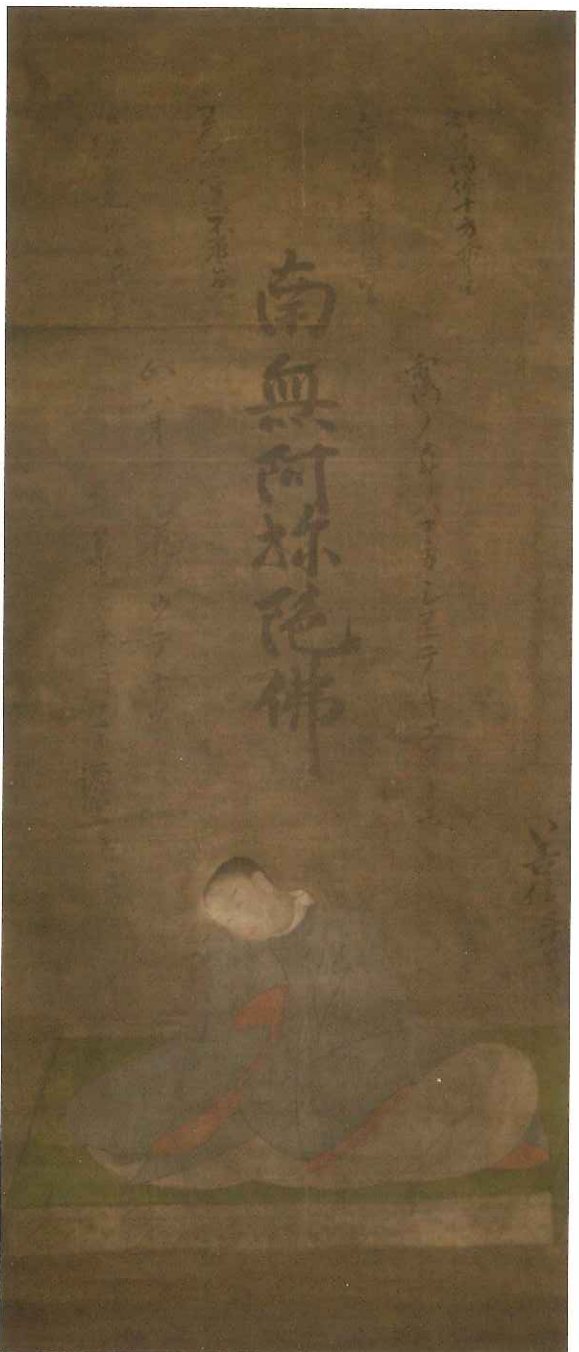
黄地十字名号 (真宗高田派専修寺蔵)



惠信尼像 (龍谷大学蔵)



覚信尼像 (新潟県大谷派福因寺蔵)



禿御影（長野県大谷派本誓寺蔵）



善信三十五才

露ノ身ハコ、カシコニテキエヌトモ

設我得仏十方衆生

至心信樂欲生我國乃至

南無阿弥陀仏

十念若不生者不取正覺

唯除五逆誹謗正法

心ハオナジ花ノウテナゾ

承元元年三月十一日 源空七十五歳

聖人三十五歳の春、流罪地への出立の姿を描いた
絵像である。還俗させられて僧形ではなく、髪が若
干伸びた姿は、大変珍しい。中央に名号、上部に第
十八願文、左右に和歌を書き、親鸞聖人と法然上人
の別れを表現している。ただし記されている和歌は、
九条兼実との別れに際して法然上人が送った返歌と
して伝えられるものである（『法然上人行状絵図』
第三十四卷）。作製年時は不明だが、室町期から江
戸初期と考えられる。



日野有範像（真宗大谷派蔵）

発刊にあたって

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌を二〇一一（平成二十三）年に迎えるにあたり、あらためて聖人の御生涯、教への再確認が求められている。それに応えるべく、教学研究所においては、基礎研究業務の中の「真宗の歴史研究班」として『親鸞聖人行実』の改訂作業に取り組んで三年あまりを経過した。その作業が取りあえず完了して、このたび新たに『親鸞聖人行実』を発刊することとなった。

これは一九六〇（昭和三十五）年に発行された『新訂親鸞聖人行実』（教学研究所編）を大幅に増補改訂したものである。一九六一（昭和三十六）年の親鸞聖人七百回御遠忌に際して発刊された同書はほぼ五十年を経過しており、文言の表記やレイアウト等、現代にはそぐわないものとなってきた。その点に留意しつつ、その後の研究成果、近年の着目点などを加味して、増補改訂したのが本書である。

増補の内容では、今回新たに親鸞聖人の伝記に関する伝承史料を掲載したことが大きな特徴である。近年、実証研究で軽視されがちであった伝承史料への注目が集まっている中で、民衆の中で語られ、伝承されていた親鸞聖人の姿を掘り起こすことによって、実証研究とは違った角度での「民衆の中に息づいていた宗祖」としての親鸞に出遇っていただければ幸いである。

真宗門徒は在家生活を営みながら、日々『正信偈・和讃』に親しみ、聖人の毎月の命日、報恩講など

の仏事を生活の一環として営むことを通して、聖人の生涯や遺徳を偲んでいる。それとともに、聞法の中で自らを日常的に問い直しながら、聖人の門徒としての自覚を確かめている。

これまでも五十年ごとの御遠忌を、聖人が明らかにされた真宗について、門徒としての自らの了解を問い直すための勝縁としてきた。この度の御遠忌においても、自らの信心を聖人の生涯と教えを通して、改めて問い直すことが最も大切である。そのことよってのみ、私たちは真宗門徒たり得ているのである。

今回の『親鸞聖人行実』の発刊は、その一助となるであろう。聖人の生涯を敬慕しながら、自らの真宗の学びを深める機縁となることを念願してやまない。

二〇〇八（平成二十）年十月十日

教学研究所長 小川 一 乘

初版緒言

世界の思潮に照応して、親鸞の思想的解明が新しい展開を見せようとしているとき、史料の上から親鸞の行跡を明らかにするための研究も、幾多の困難を克服してその成果が逐次結集されてきている。本書は最近の研究に徴し、最も確実な史料のみを基礎として、聖人の生涯の事蹟をその史料の集録によってあとづけたものである。さきに家永三郎編『親鸞聖人行実』が刊行されているが、本書はその後の研究による成果をも整理して一層の精確を期した。偏えに学界各方面の多年にわたる親鸞研究の思恵によったものである。参考までに、若干の脚註をほどこし、あわせて聖人に関する略系図、門侶交名牒、及び在世年表と滅後約百年間の年表、並びに簡単な索引とを付した。本書がひろく親鸞に関心をよせる人々の座右に供せられるならば、これにすぎざるよろこびはない。

本書の編集については、大谷大学藤島達朗教授の懇切な指導を受けながら、主として当研究所の松本専成がその任に当たり、熊谷宗致、三露迪雄の両名がこれを助けた。

昭和三十五年七月二十日

改 版 序

近年、諸方から本書の再版を求められる。

その要望に応じてこのたび、真宗大谷派宗務所出版部から、本書が改版されることとなった。教学研究所から初版を刊行して、既に十年余の歳月を経過している。その後の学界の研究成果をもふまえて、若干の補筆訂正をしなければならないところもある。

大谷大学教授藤島達朗博士の御指示を頂いて、いくつかの事蹟を挿入し、あわせて脚註を補強することができた。所蔵者の異動など、各位の御示教も採らせていただいた。記して深く感謝の意を表す。

昭和四十五年一月

編 者

凡 例

一、本書は、確認された親鸞聖人の遺文を中心に、恵信尼をはじめ聖人門流の伝えた聖人遺文、言行録、その他によって、聖人生涯の事蹟を編年体であとづけたものである。

一、記載順序は左の通りである。

【上段】 聖人年齢、西暦、和暦、干支、改元

【下段】 行実要項、依拠史料名、所蔵者名、史料の内容、註

一、註には、史料の性格、その他の参考事項を略記してある。親鸞聖人、法然上人を除いて上人号は略した。

一、依拠史料名に冠した記号は、史料について、それぞれ次のことを表示する。

◎ 聖人および恵信尼の真蹟

○ 門流による書写

◇ 門流による編著

▽ その他による編著

一、漢字の字体は、当用漢字を含めた現行の通行体とした。

一、もと片仮名の史料も、漢文以外はすべて平仮名を用いた。仮名の古体字・変体仮名・略字等は、現行の平仮名に改めた。括弧内の文字は、振り仮名、年時、地名、人名、脱字等について、編者の私見を示したものである。

一、年月日不明の消息、文献については、編者の判断によって、推定と記して該当年時に編入した。なお、現存の聖人真蹟遺文で成立年時未考証のものは、まとめて聖人入滅条の直前に編入してある。

一、参考史料として掲載している『興福寺奏状』『三長記』『明月記』『一向専修停止事』は、利用の便を図るため延書にしてある。『三長記』『明月記』は、底本が白文であるので編者が延書を作成した。『興福寺奏状』『一向専修停止事』は、原則底本の訓点に従い作成した。また括弧内の文字は訓点のない振り仮名等を示してある。それぞれの原文は、史料翻刻を参照されたい。

一、索引項目は、親鸞聖人行実と伝承・伝説の親鸞聖人に出る主要な人名、地名、書名に限定してある。

一、参考資料として、次のものを収載した。

(一) 略系図 『尊卑分脈』内磨公孫、貞嗣卿孫(『新訂増補国史大系』所収)、実悟編『日野一流系図』(大阪府真宗大谷派願得寺蔵)を略抄したもの、及び『日野氏系図』(真宗高田派専修寺蔵)。

(二) 親鸞聖人門侶交名牒 愛知県妙源寺本、茨城県光明寺本、『本願寺通紀』所載山梨県万福寺本の三本を対照。山田文昭編『三本対照親鸞聖人門弟交名牒』に基づきつつ、一部について修正を加えた。

(三) 親鸞聖人門侶列名 旧版の門侶列名(『大谷大学藤島達朗教授の御好意によって、その研究成果の一部を印行したもの』旧版凡例)に基づきつつ、一部について修正を加えた。

(四) 史料翻刻(漢文) 親鸞聖人行実に収載した、『興福寺奏状』『三長記』『明月記』『一向専修停止事』の底本を翻刻した。

(五) 伝承・伝説の親鸞聖人 聖人の生涯を、誕生と幼少、叡山時代、吉水時代、越後時代、関東時代、帰洛と入滅に区切り、主として江戸時代の「親鸞伝」から特徴のある伝承を選び、関係部分を適宜、抜き書き・引用した。

(六) 御消息対照表 聖人の消息類を原則本書に従って配列し、各消息集との対照を示した。

(七) 略年表 当研究所で編纂した。

一、門侶交名牒 利用上の注意

(一) 妙源寺本、光明寺本の本文順序は原本に従い、後世の記入、改纂を点線で囲んである。万福寺本は前者との対照のために移動した部分がある。

(二) まず聖人の直弟をあげ、次に真仏の付弟を出し、さらにそれらの法孫が掲げられてある。対照の便をはかって、聖人の直弟に数字を、真仏の付弟に仮名を付した。

(三) 括弧内の文字は、編者の記入である。

一、史料翻刻 利用上の注意

(一) 底本に、訂正・補記等がある場合、その指示に従って本文を直した箇所には註を付し、そのことを示した。それ以外は、訂正・補記等が判るよう、本文中の行間、あるいは註にて示した。

(二) 底本には、返り点が不足していたり、誤写と思われる箇所もあるが、そのまま翻刻した。判読が困難な文字は□で示した。

一、伝承・伝説の親鸞聖人 利用上の注意

(一) 当編への収録において、『真宗史料集成』『大系真宗史料』等の史料集への所収があるものはこれを底本とし、未収のものは板本に拠った。

(二) 補足・註記がある場合は()で示した。なお、割註部分を抜き書き・引用する場合は引文内に「割註」で示し、本文と同じ活字の大きさで続けた。また、原文に脚註がある場合は「(脚註)」と示し、別掲した。

親鸞聖人行實

一一七三

(承安三年)

癸巳

1歳 誕生

◎唯信鈔文意(真宗高田派専修寺蔵)

(本文略)

康元二歳正月廿七日

愚禿親鸞八十書之
五歳書之

◎一念多念文意(真宗大谷派蔵)

(本文略)

康元二歳丁巳二月十七日

愚禿親鸞八十書之
五歳書之

聖人は、著述や消息に年時年齢をおおむね自著する。その年齢から逆算すればすべて承安三年の誕生が確かめられる。

出自

◇本願寺聖人伝絵（上巻第一段・真宗大谷派蔵）

夫聖人の俗姓は藤原氏天児屋根尊二十一世の苗裔大織冠鎌子の玄孫近衛大将右大臣内大臣贈左大臣従一位内廬公号後長岡大臣或号閑院大臣贈正一位太政大臣房前公孫大納言式部卿真楯息六代の後胤弼宰相有国卿五代の孫、皇太后宮大進有範の子也、

『本願寺聖人伝絵』（以下『伝絵』と表記）は、絵と詞からなる絵巻で、聖人の伝記の嚆矢である。本史料には、編著者覚如の自筆本で康永二年（一三三三）の奥書をもつ大谷派蔵本（康永本といわれる）の他に、康永本の前に作製された本願寺派本願寺蔵『善信聖人伝絵』、高田派専修寺蔵『善信聖人親鸞伝絵』などの諸本がある。本書では、完成本といわれる大谷派蔵本に拠る。

9歳

一一八一

(養和元年)

辛丑

治承5・7・14
改元

慈円のもとなて出家得度 範宴少納言と号するといふ

◇本願寺聖人伝絵（上巻第一段・真宗大谷派蔵）

しかあれば、朝廷に仕て霜雪をも戴き、射山に趁て、栄花をも発くべかりし人なれども、興法の因うち萌し、利生の縁ほかに催しによりて、九歳の春比阿伯従三位範綱于時従四位上前若狭守卿後白河上皇近臣聖人養父前大僧正慈円 慈鎮和尚是也法性寺殿御息月輪殿長兄の貴房へ相具したてまつりて、鬢髪を剃除したまひき、範宴少納言公と号す、自爾以来しばし南岳天台の玄風をとぶらひて、ひろく三観仏乗の理を達し、とこしなへに楞嚴横河の余流をたへて、ふかく四教円融の義に明なり、